

肥後國  
阿蘇山

(釋日本紀述義)筑紫國風土記曰、肥後國闕宗縣、縣坤二十餘里有一禿山、曰闕宗。岳頂有靈沼、石壁爲垣、許可縱五十丈、橫百丈、深或二十丈、或十五丈、清潭百尋、鋪白綠而爲質、彩浪五色、組黃金以分間、天下靈奇出茲峯矣、時々水滿從南溢流、入于白川、衆魚醉死、土人號曰苦水、其岳之爲勢也、中天而標峙、包四縣而開基、觸石興雲、爲五岳之最首、濫觸分水、寔群川之巨源、大德巍々、諒人間之有一奇形杳々、伊天下之无雙、居在地心、故曰中岳、所謂闕宗神宮是也。

〔鹽尻〕筑紫風土記、闕宗五岳、高岳 檜尾岳 往生岳 猫嶽三御

〔鹽尻〕三十九明世宗封我肥後州阿蘇山曰壽安鎮國之山、夫我富士山以下、各國名山多キ矣、獨り封阿蘇者何乎、

按に、釋日本紀十、有以阿蘇爲我國中岳云說、故義滿特ニ請之然ル乎、

○按ズルニ、阿蘇山ヲ壽安鎮國山ト稱シ、又山上ノ沼ヲ神靈地ト稱スル事ハ、神祇部阿蘇神社篇ニ在リ、宜シク參照スベシ、

〔西遊記〕阿蘇山

今よひは阿蘇の大宮司のもとに一すくして、あすこそは峯にのほらんと心させしに畫過る頃より風の色少しあしうみゆれば、あすになりて雨ふり、登山の縁をうしなはん事もやと思ひめぐらすにぞ、心あはたゞしう成り来て、今よりもと思へど道なし、すぐさんもほいなければ、山の北の麓の的石といふ里に入りて、あないの人を頼みて、山の北おもてより登る、木こりのみ行かへば道いと細くけはし、絶頂に至り付ば、日既にくれはてぬ、晝參詣多き時に、商ふためと、旅人などの行くれたるが、宿る爲に茅屋あり、唯むしろもてかこひたるばかりにて、床とてなし、此内に入りて宿る、名高き峯に登りつめて、空もいと近う、星探るべき程なるに、夜あらしの吹わたる音も物すごくて、一山人倫たえ、四方寂ばくたるに、夜ふくるまで目もあはず、又もゆるあたりも